

ある出会い

ボランテア 保木登茂子

ある情報誌の片隅で目に止まった、ほんの一字「お話し相手のボランテアを募る」に文章に釘づけになった。

出来るかな、二から三日考え、思い切って電話をかける。私なりに熟慮し、いざ行動。資格、年齢制限等々をお聞きし後日、面接に伺う約束をした。

私の住む豊中東泉丘より箕面北小学校バス停までバスと北急を乗り替えて、三回の所があり、それよりひたすら山へと登った所にあかつき特別養護老人ホームの建物が目に入った時は、内心ホットした。

ほどなく口村さまと面接、ケータイも運転免許も持っているだけで利用しないので無いに等しい。有りませんと答え、歩いて来ますという私に戸惑っておられた事でしょう。

ボランテアの三上さまに紹介され、大いに学び帰り駅まで送って頂き、次の約束をし、又、坂道を登る少しづつ廻りも目に入る。

何と胸突き八丁の獣道、私が最初に出会ったコバルトブルーの川蟬、うつくしいな。ふうふう杖の傘を突いて進んでくる私を眺めるように、一時休んで、一瞬の内に奥山へと飛んで行った。

事務所に入ると番犬のミミちゃんとポンちゃんに大声

で吠えられ出迎えられる。

まだ当時、六十四歳されど、六十四年生きて一人で人生の大先輩の方々とお話し笑い、そして皆で唄う。

飛び込んだのです。未知の世界へ。忘却は又めぐり、文字を追いつくさみ、合の手も入れて下さる。

甦る記憶、歌の時間が一番楽しみと言って下さる。

ほどなく南様がボランテアに来て下さり、木曜日も一段と賑やかに楽しく美声を聞かせて貰ってましたのに、心臓手術で体が故障中。

又一人で世界中を一緒に歩いたボロ赤リュックを背に鎮守の森の坂道をコツコツ傘の杖に身を委ねながら、七十歳の坂道をボランテアに。みんなが待つて下さるから。